

梅若研能会ベルリン公演

フェリシタス・ブランク (Felicita BLANCK、フリージャーナリスト)



[ベルリン日独センター](#)は、日本関連のさまざまなトピックを取り上げる多彩なイベントを数多く実施する財団だが、このたび、本格的な能公演をベルリン市民に紹介する貴重な機会の実現に一役買うことができた。すなわち、[国際交流基金ケルン日本文化会館](#)と協力して、能楽の世界でも巨匠といわれる能楽師をベルリンに招聘する企画を立て、2018年初頭にベルリン音楽祭ディレクターのヴァインリッヒ・ホップ(Dr. Winrich HOPP)に打診したのである。その後、入念な調整プロセスを経て、[ベルリン音楽祭](#)の2019年プログラムに能公演が組み込まれることになった

観世寿夫(能楽師、1925年~1978年)

能楽師は、彼岸と此岸を仲介する役割を担っている。¹

ベルリン日独センター註

1. 独文からの訳。日本語原文の出典不明。



本稿は、東京に拠点をもつ梅若研能会の2019年9月3日のベルリン・フィルハーモニーを会場とする公演と、能楽全般に関する考察を組み合わせたものである。

本稿にはまた、ベルリン公演で舞台上に立った女性能楽師梅若紀佳とのインタビューからの引用も散りばめた。能楽は元来男性能楽師のみが上演するものであり、ようやく女性にも門戸を開いたのは20世紀に入ってからだったため、女性能楽師は現代でも200人前後しか存在しない。その一人である梅若紀佳は3歳で能楽師としての修行を始め、ベルリン公演では「恋重荷」において主人公「シテ」に相伴する「ツレ」の役割の女御を演じた。

能楽において全てを支配する要素は時間である。西洋の多くの演劇とは異なり、能楽で時間を測定し、把握することはほとんど不可能である。時間が限りなく伸びるように感じられることもあれば、一瞬で百年を飛び越えたかのように縮むこともある。時間は演目のナラティブおよび音楽ならびに空間を——役者[能楽師]²がスローモーションで、あるいは観客がスローモーションと解釈するテンポで静かに横切る空間を——支配する。役者の動きは、メトロノームの拍子のように時間を一定の単位に分割する太鼓のバチのリズムに服従する。能公演を鑑賞する観客は、あらゆる時を超えた空間に存在するかのような印象を抱くが、のど奥から絞り出した呪文のような歌声[謡]は、その印象を強める。

2. 訳文では独文の単語を残し、鉤括弧に該当する日本語用語を掲載。



梅若紀佳、能の精神性について³

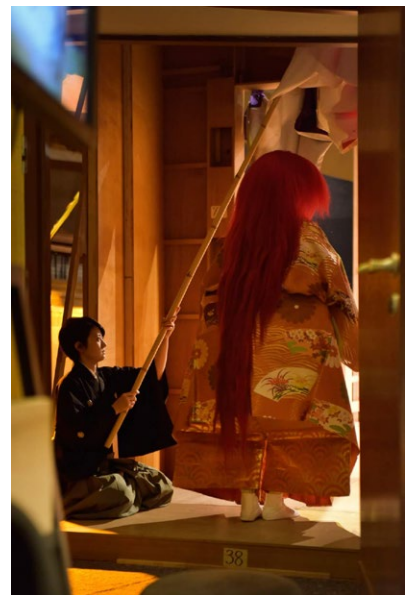
能はもともと神事だったので、私たちは舞台裏でもすでに神々に捧げる気持ちで出を待ちます。これは、能楽師だけでなく、私たちをサポートしてくださる方々にも当てはまります。能楽師でなくても、能に関わるすべての人が神々に仕えているのです。だからこそ、舞台裏でも気を緩めることはありません。

9月3日の晩、フィルハーモニー会場で筆者の隣席には、能楽公演に見事にマッチしたスタイルの白人ヨーロッパ人女性が座っていた。つまり、着物のような長い衣服に、足元にはぴったりとした足袋というスタイルである。これを文化的同化とみるか、それともある文化に対する熱狂の表れとみるかは、みる人の視点次第である。

ベルリンで梅若研能会は能楽の古典演目から、祭祀的な舞事「猩々乱双之舞」(ドイツ語題「酒の霊」)、幕間劇として狂言「雷」(ドイツ語題「雷神」)、そして最後にドラマチックな能演劇「恋重荷」(ドイツ語題「恋の負担」)の3演目を紹介した。各作品それぞれに独自の雰囲気があり、それが動き[所作]や衣装[能装束]に反映されていた。

3. 以下引用はすべて独文からの和訳。

ベルリン公演には主役[シテ]を演じる梅若家の役者、脇役[ワキ]の役者、そして幕間の狂言の役者が参加していた。それぞれが主役の役者[シテ方]、脇役の役者[ワキ方]、狂言の役者[狂言方]のいずれかに特化しており、それぞれが何代もつづく能楽師の、各々の役割に特化した家系の出身である。これは、幼少時から自分の楽器を完璧にマスターすることを学ぶ音楽家[囃子方]にも該当する。ベルリン公演の中心となり、梅若研能会の母体財団を主宰する梅若家は日本最古の能楽師一家のひとつであり、観世流に所属する。能楽では観世流も含めて五つの流派が現在までつづいており、能楽師はそれら流派から誕生する。五つの流派それぞれが特定の家系に発端をもち、その起源は遠い過去にまでさかのぼる。梅若家によれば、梅若家の場合は能の前身である散楽が中国大陸より日本に伝わった八世紀にまでさかのぼることが可能だそうである。



梅若紀佳、幼少期について

私はすでに母胎で能を体験しています。実家には能舞台があり、食事中でも、誰かがどこかで謡を練習しているのを必ず聞くことができました。私に能を教えてくれたのは祖父と父です。私はまだ子どもだったので、役を綺麗に演じるのではなく、むしろ美しい所作に集中するように言われました。日常生活での一挙手一投足が美しくなかったり、精神が揺らいでいたりすると、それがすべて舞台上に表れてしまうというのです。ですから、毎日の生活をできるだけ良く過ごすように言われました。そして舞台上では集中して、さまざまなことに耐える必要性を説かれました。



「猩々乱双之舞」

最初の演目「猩々乱双之舞」は古代中国が舞台である。話は、能楽における伝説的な生物「酒の霊・猩々」を中心に展開する。猩々[シテ]は忠実な農夫[ワキ]に、汲めども尽きぬ酒壺を与える。猩々にまつわる伝説は数多い。役者は常に赤いかつら[赤頭]を被り、猩々特有の笑い口の面[緋大口]をつけ、額には髪の毛がかかる。猩々の恍惚とした踊りは本公演のなかでも最も魅力的な場面のひとつであり、シテに同行するツレが同じ衣装[赤地唐織]とかつらを身に着けて登場すると、観客の歓喜は一層高まる。「猩々乱双之舞」では、最初に質素な衣装を着たワキが登場する。ワキの、落ち着いた色調の簡素な衣装は、今日なお日本人男性が着用する一般的な着物に非常に似ている。このワキが、観客に対してシテの登場の布石を敷く。シテは手の込んだ、赤と金の厚板の衣装で登場するが、異なる色合いのいくつかの衣装が重なり合い極めて大きなボリュームとなる結果、他の役者に比べて巨人のように大きく見えるほどである。この衣装のボリュームを通して、シテは舞台と観客を支配する巨大な彫像のように映る。

梅若紀佳、能楽における女性について

私の家系には600年の伝統があります。いつか子どもが生まれたら、男の子であっても女の子であっても構いませんが、その子がこの伝統を受け継いでみたいと思ってくれたら嬉しいです。



「雷」

二つ目の演目は、喜劇の範疇に数えられる狂言である。若い薬師が、空から落ちて腰を打った雷神をみつめて鍼治療する話である。深刻な題材の能の演目とは対照的に、狂言の動きははるかにダイナミックで、音楽はより抑制され、衣装は赤ではなく青が支配的である。

「雷」の後に休憩となった。そのとき、赤い模様の着物を着て、髪を緋色に染めたとても背の高い女性が観客席にいるのが目にとまった。その姿は、狸々の生まれ変わりのようだった。

梅若紀佳、能の流派について

能にはさまざまな流派があります。梅若研能会は観世流に属します。観世流は他の流派に比べると華やかだと言われています。また、謡の音調も他の流派よりも高いため、華やかな局面が強く打ち出されますし、所作も他の流派と異なります。観世流に属する梅若研能会の現在の様式は、祖父が創出したものです。そして、おそらく曾祖父もまた、少し違った様式で舞台に立っていたのでしょう。



「恋重荷」

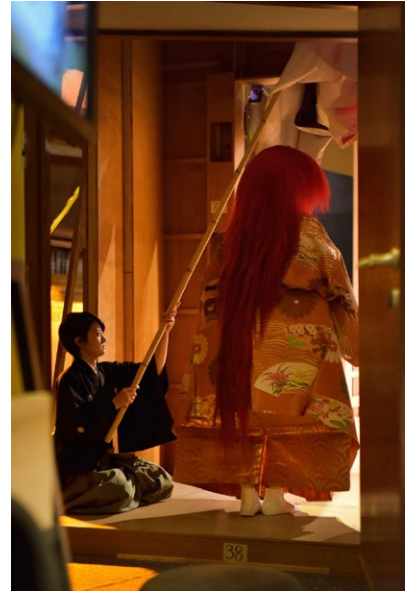
休憩の後に上演された三つ目の演目「恋重荷」は、本公演のドラマチックなハイライトであった。これは、老いた庭師荘司[シテ]が優雅な女御[ツレ]に抱く片思いの物語である。荘司は、一見軽そうに見える美しく装飾された荷を持って庭を百度廻れば女御の心を射止めることができると言われ、その荷を持ち上げようとするものの——本人には理由が分からないまま——持ち上げることができず、辱めを受けた悲嘆の末に息絶える。最後の息で荘司は女御を恨み、報復を誓う。死んだ荘司を見つけた女御は、巖に押さえつけられたかのように凍りつき、身動きできなくなる。本演目の後半で亡霊となった荘司が女御の前に現れ、その仕打ちを厳しく非難する。女御の苦しむ姿を見た荘司は女御を許し、その守り神となると約束する。

最初に小道具を担当するヘルパー[後見]が、その忌々しい荷を舞台上に運ぶが、そのヘルパーも、重い荷に難儀しているかのように見える。西洋演劇とは異なり、公演に携わる者はすべて舞台に立ち、物語の文脈で行動する。ヘルパーの役割が重要なことは、梅若紀佳が演じる女御が登場し、ヘルパーが女御の嵩のある衣装を注意深く引いて声をかけつつ舞台右前の指定の場所に誘導するシーンで顕著になる。しかしながら、公演中で最も印象的な衣装をまとうのは女御ではなく、亡霊となって登場するシテである。シテの衣装は黄金、白、黒の厚板が何層も重なるもので、観客には雪山を髣髴とさせる。これは、もしかしたら加齢の、すなわち高齢者であることの象徴なのかもしれない。しかし、シテが手を上げると、袖の外側とは対照的に濃く染められた内側が見え隠れし、シテがもう一度変身したかのような印象を受ける。この場面の台詞には、「ああ、葛の葉が裏返るように、深い恨みが明らかになる。」⁴とあった。

4. 独文からの訳。原文は、「恨めしや葛の葉の」と思われる。

梅若紀佳、舞台恐怖症について

ケルンの公演が始まる前は、緊張して手が震えてしまいました。でも、他の人たちが私を支えてくださるので、気を落ち着けて集中して舞台をこなすことができました。祖父は何度も「恋重荷」を演じていますが、役に入り込むためには舞台前に改めて集中することが必要だと言っていました。



梅若研能会の公演にあたり、ケルン日本文化会館が所蔵する仮設能舞台がベルリンに移設されたが、観客が、フィルハーモニーの円形の会場のどこからでも舞台を追うことができるように、前方の柱[目付柱と脇柱]の上部と屋根は省略された。劇場の観客が見たものは、本質的には日本の古典的な木造家屋で、その横側から水の上にかかっているかのように橋[橋掛り]がのびている。能楽においては、舞台も魅力的な側面を成すひとつの要素である。日本の神社や伝統的な住宅も見た目は能楽舞台とさほど変わらず、ほぼ同じような構造である。その意において、日本の演劇、神社における故人崇拜、伝統的な農家は、西洋の人間が考えるよりもはるかに多くの相互関係にある。それぞれの建物はすべて非常に似ており、すべてがすべてに関連する。

梅若紀佳、現代の若者に能を身近に感じてもらう方法について

若者に対する啓発は非常に重要で、私たちも積極的に活動しています。というのも、日本の若者の多くは教科書でしか能を知らないからです。ですから日本全国の学校を訪問し、体育館に仮設舞台を設置します。つまり、生徒が普段運動する場所で、能の公演を観ることができるのです。誰かに私の仕事について尋ねられたら、普通なら「能楽師です」と応えますが、聞き手が能楽師を知っていることを前提とすることはできません。ですから、最初に「能を知っていますか」と聞き返さなければなりません。そして、応えが「いいえ」だったら、そこから説明しなければなりません。そういうことがつづくと、少しがっかりしますね。

この何世紀にもわたる演劇の伝統が人々に与えてきた魅力は綿々とつづき、途切れたことはない。そして、日独間の文化接触を通して、私たちヨーロッパの人間も自分自身について多くのことを学ぶことができる。これまではおそらく全く未知の世界だった表現形式を通じて、自分自身を再発見し得るのである。このようにして、精神的な真実の探求や美と平和の探求など、日独・日欧間で非常に多くの共通項が何世紀にもわたって生きつづけており、今後も生きつづけることであろう。

本公演は、ケルン日本文化会館の創立50周年記念ヨーロッパ巡回公演(チューリッヒ→バーゼル→ケルン→ベルリン)の一環として、また[東京ベルリン友好都市提携25周年記念](#)として実施された。

共催機関: ベルリン・フェスティバル公社 / ベルリン音楽祭、国際交流基金 / ケルン日本文化会館

協力機関: ベルリン日独センター